

活用カ 1 物語文を読む

組 番 名前

点数

100

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔中国の唐の時代の話。洛陽の都に、杜子春という若者がいた。杜子春は金持ちの息子だったが、両親の死んだあと財産を使い果たし、日々の暮らしにも困るようになっていた。ある日の夕方、杜子春が都の西の門の下にぼんやりと立っていると、一人の老人が現れ、夕日で地面に映る自分の影の頭にあたるところを夜中に握ってみよと告げた。〕

杜子春は一日のうちに、洛陽の都でもただ一人という大金持ちになりました。あの老人の言葉どおり、夕日に影を映してみても、その頭にあたるころを、夜中にそっと握ってみたら、大きな車にもあまるくらい、黄金が一山出てきたのです。

大金持ちになった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けないくらい、ぜいたくな暮らしをはじめました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日に四たび色の変わる牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼にするやら、玉を集めるやら、錦をぬわせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子をあつらえるやら、そのぜいたくをいぢいぢ書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならないくらいです。するとこういううわさを聞いて、今までは道で行き合っても、あいさつさえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやってきました。それも一日ごとに数が増して、半年ばかりたつうちには、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないもの

は、一人もないくらいになってしまったのです。杜子春はこのお客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りのまた盛んなことは、なかなか口には尽くされません。ごくかいつまんだだけをお話ししても、杜子春が金のさかずに西洋から来た葡萄酒をくんで、天竺生まれの魔法使いが刀をのんで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を面白く奏しているという景色なのです。

しかしいくら大金持ちでも、お金には際限がありますから、さすがにぜいたく家の杜子春も、一年二年とたつうちには、だんだん貧乏になりだしました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、あいさつひとつしていきません。ましてとうとう三年目の春、また杜子春が以前の通り、一文なしになってみると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなっていました。いや、宿を貸すどころか、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。そこで彼はある日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、老人が、どこからか姿を現して、「お前は何かを考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。

〔芥川龍之介「杜子春」より・一部表現や表記を改めたところがある。〕

1 この場面を、紙芝居にしました。



① 大金持ちになった杜子春は、立派な家を買って、ぜいたくな暮らしをしました。

②

③ ところが、一年二年とたつうちに、杜子春はだんだん貧乏になり、とうとう一文なしになってしまいました。

④ ある日の夕方、杜子春がもう一度洛陽の西の門の下に立っていると、あのとときの老人がふたたび現れました。

(1) ②の台本を、四十字以内で書きなさい。

A large grid for writing the script for scene 2, with a dashed line indicating the 40-character limit.

(2) ④の台本を、紙芝居として朗読する場合、どのようにつまむとよいですか。次のア～エから一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 前半は怒ったように、後半は楽しげに読む。
イ 前半は眠たそうに、後半は忙しそうに読む。
ウ 前半は悲しげに、後半は少し元気に読む。
エ 前半はうれしそうに、後半は不満そうに読む。

2 「お前は何を考えているのだ」とありますが、このとき杜子春は、どんなことを考えていたと思いますか。想像して、書きなさい。

A large grid for writing an answer to question 2, with a dashed line indicating the 30-character limit.

解答

- ① (1) 例 杜子春の家にたくさんのお客が来るようになって、杜子春は毎日酒盛りを開きました。(38字)

**採点基準** 「人が集まった」「酒盛りをした」の二つの内容が含まれていること。

- (2) ウ

- ② 例 「あんなにむだづかいをしなければよかった。」ということ。

**採点基準** 物語の内容に沿って、杜子春の気持ちを想像していればよい。

解説

- ① (1) ②の場面は、上段の終わりから四行目の「するとこういううわさを聞いて」から、下段八行目の「笛や琴を面白く奏している」という景色なのです。」までの部分です。

この部分の内容を、簡単にまとめましょう。「酒盛りを開いた」ことだけでなく、「人がたくさん来た」ことも入れてまとめるとよいですね。

- (2) 前半は杜子春の途方に暮れた様子がかかるように、後半は杜子春を金持ちにしてくれた老人がもう一度現れたことから、少し希望の持てる感じで読むとよいでしょう。  
ア・イ・エはそれぞれ物語の内容と合わない部分があります。

- ② 杜子春の気持ちを想像して書きましょう。「なんでこうなってしまったんだろう。」「お金がなくなって、これからどうしようかな。」「人間とはなんて薄情なものなのだろう。」「」などでも正解です。